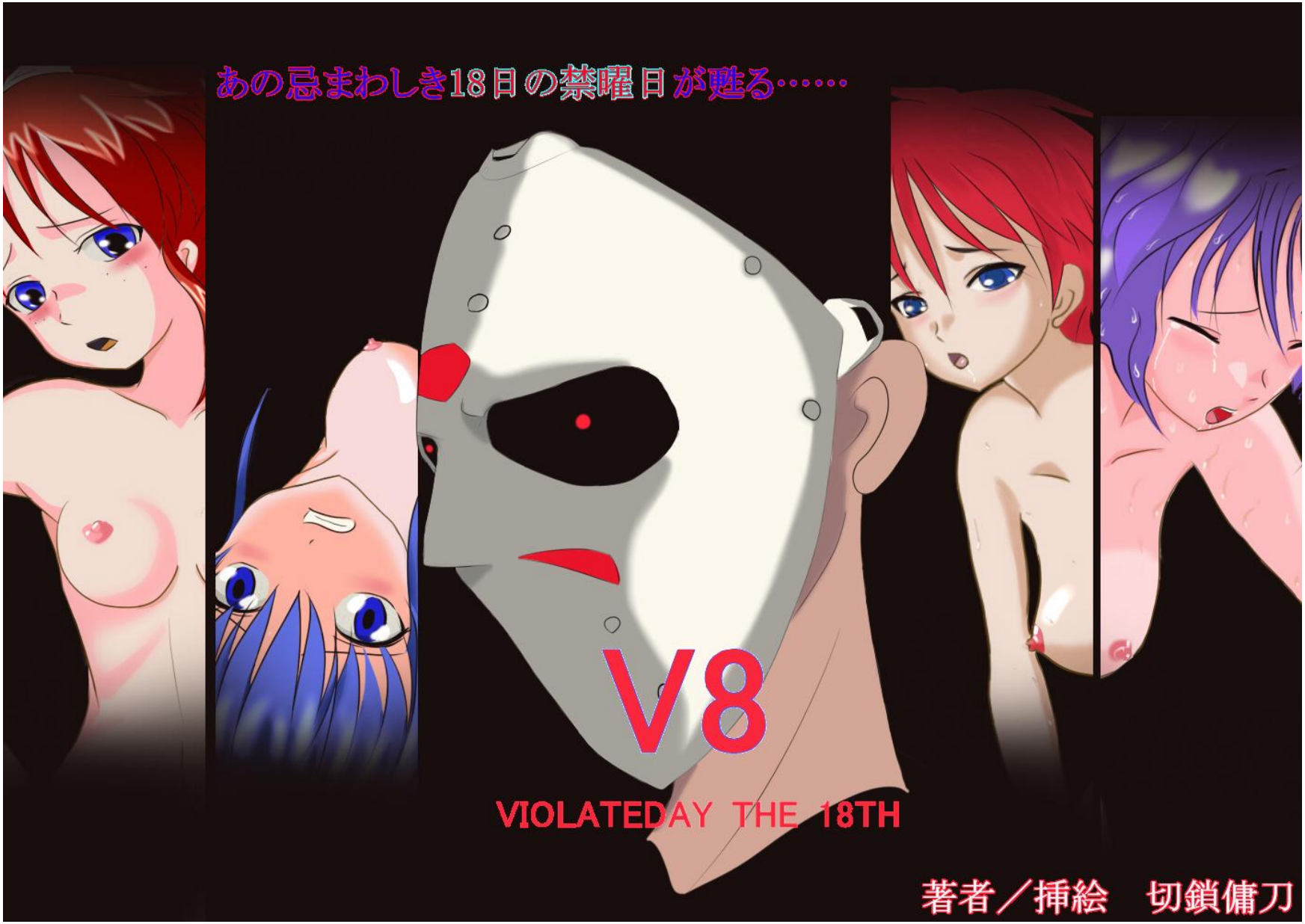
あの忌まわしき18日の禁曜日が甦る……
V8
VIOLATEDAY THE 18TH
著者／挿絵　切鎖傭刀

――淡い常夜灯に浮かぶスレンダーな少女の裸体が、艶かしい舞いを刻んでゆく。
赤いショートヘアを軽やかに揺らすボーイッシュな美貌は、愛らしく頬を紅潮させており、天を仰ぐ子猫のような瞳は陶酔に濡れていた。男の股間に跨った腰が舞う度にベッドが軋み、太い肉棒が見え隠れする陰部で粘着質な音色が淫猥に漏れる。
「あんっ……❤　はぅっ……❤　んっ……❤ッ」
悩ましくも甘美な喘ぎ声が響く中、八十三センチの美乳が張りを伴い“ぷるん”“ぷるん”と健気に弾み、乳房の先端で淡く色づく小粒な蕾が淫猥な屹立を描いていた。激しい律動に踊る瑞々しい柔肌に珠のような汗が煌き、官能に彩られた未成熟な女体が部屋に充満する淫臭と共に危うい色香を放つ。
「あっ……❤　やぁ……❤っ……んッ❤」

ベッドに寝転んでいた男が少女と繋がったまま身体を起こすと、細い肢体は仰け反るようにシーツの波に倒れ込んだ。彼の両手に腰を抱え上げられ、女体が艶かしいブリッジを描く。膣に埋没した男根が敏感な粘膜を刺激し、悩ましくうねるように身悶える。
「あふっ……❤　ん……❤っ……エリックぅ……❤」
ねだるような声で男の名を呼びながら哀切に腰を揺すると、エリックは端正な風貌に微笑みを浮かべた。荒い吐息を弾ませつつ膝立ちの体勢を整え、肉欲の律動を刻みだす。
突き揺らされる少女は甘味な喘ぎ声を漏らしながら、両手でシーツを掻き毟り悶えた。
「あぁんっ……❤　んっ、やっ……❤　はげしっ……❤　くぅんっ……❤っ！」
柔肌の弾け合う炸裂音に混じり、淫らな音色と喘ぎ声がセッションを奏でるさまは、さなが

ら淫靡なオーケストラのようだ。突き揺らされる少女の艶かしい肢体がシーツの波を泳ぐ。
「あんっ！　きちゃうよ……❤　エリックぅ……❤　あたしっ……いっちゃうぅぅっ❤」
熱にうなされるような弱々しい声と吐息を弾ませ、美貌を振り乱して錯乱の様相を放った。
エリックは荒い吐息を刻み、腰の動きを加速させながら少女と共に高みへ昇る。
「イっちゃえよッ……アンヌっ……俺もッ……イキ、そうだ……ッ」
「ふぁ……あんっ！　や、あんっ！　いくっ……❤　いくうぅ……❤　ふあああぁぁ……ッ❤」
少女の肢体がビクビクと小刻みに痙攣を描く。子猫のような瞳を見開き、折れんばかりに腰を反らせて絶頂の予感に切迫した色を弾けさせた。
刹那、男は苛烈な一振りを叩き込むと、プルプルと震える乳房を鷲掴みながら、精の奔流を吐息と共に解き放つ。
「うあッ」
「んあああぁぁぁ〜〜〜ぁあぁっ‼」
アンヌは流れ込む洗礼にガクガクと戦慄き、汗の珠を散らしながら絶頂の嬌声を響かせた。
男根が膣孔から引き抜かれ、小刻みに震える下腹部の淫裂からドロリと白濁の粘液が溢れる。白いシーツに広がる粘着質な水溜りが卑猥だ。
「はぁ……はぁ……はぁ……んっ……はぁ……ぁ……❤」
弱々しい吐息を弾ませ、少女はぐったりと絶頂の余韻に身を委ねた。しかし、蕩けた眼差しは直ぐに光を取り戻し、艶かしい疲弊の色は掻き消える。
「ねぇ……も一回、しよ☆」
「はぁ？　無茶いうなよアンヌ。もう何回目だと思ってるんだ、さっきもイったろ？」
エリックはベッドに倒れ込み、呆れたような口振りで答えた。愛液と精液に塗れた肉棒はグッタリと項垂れており、次のラウンドに挑める状態ではない。
「うん……けど……なんていうか……」
アンヌはエリックとのセックスに満足できずにいた。大学生のカレが下手という訳ではなく、体力の許す限り応えてくれる。だが、以前のような刺激と興奮を感じられない。
ハイスクールの友人――ベティに相談したこともあったが、『アンヌやり過ぎなんじゃない？ ここんとこ毎晩エリックのアパートに通ってるんでしょ』と呆れられる始末だ。
――なんか新鮮な興奮を手っ取り早く感じることはできないかしら？
彼女は日ごろあまり働かせない頭を酷使して考えた。ふと脳裏に閃きが浮かぶ。
「エリックさぁ……車あるよね？　あたし達と夏休みにキャンプ行かない？」
「キャンプ？　面倒だろ。どっかドライブに行きたいのか？」
エリックが問い返すと、アンヌは緩慢に肢体を捩り、肘をついて彼へ甘えの眼差しを流す。
「キャンプがいいの〜っ。ほら、なんか恐そうな森に囲まれたとこでさ、気分を変えてやろうよ☆　きっと新鮮な快感を得られると思うんだぁ♪」
愛らしく唇を尖らせたかと思うと、少女は緩い笑みを浮かべて頬を染める。コロコロと変わる表情は子供のようだ。

新鮮な快感と言われたエリックの心情は穏やかでないものの、趣向を変えたセックスも悪くない。彼はショートカットの茶髪を掻きながら、思いついた場所を口にだす。
「そうだな……エメラルド・レイクなんてどうだ？　ブレアタウンて長閑な町にある森の湖畔なんだけど、コテージは一軒のみで解放感を優先してるらしいぞ？」
「エメラルド・レイクかー☆　うん、明日学校の図書館で調べてみるね♪」
ごろんとうつ伏せに転がり頬杖をつくと、アンヌは楽しそうに微笑んだ――――。

――放課後の鐘が鳴る中、アンヌは校舎の階段脇で、壁に背中を預けながら佇んでいた。
白い半袖シャツの胸元を赤いネクタイで飾っており、白いラインの施された紺のプリーツスカートから小麦色の引き締まった脚線美を晒している。制服に包まれた少女は活発そうな印象を与え、毎夜、男の部屋に入り浸っているとは思わせない爽やかさだ。
「アンヌー、話って何よ～」
プリーツスカートを軽やかに揺らしながら、青いリボンで結ったオレンジのポニーテールを弾ませるベティが駆け込んで来た。赤毛の少女を見上げる美貌は幼さを残しており、頬に浮かぶソバカスさえもキュートに感じさせる。アンヌとは同学年だが、醸し出す雰囲気は妹系だ。困惑の色で小動物のような眼差しを向け、プクっと頬を膨らます。
「あたしデートの予定あるんだけどー」
「ふーん……なら丁度いいわね。あ、クレアも来たわ」
釈然としないベティの背後から、ゆっくりとした足取りでクレアが歩いて来た。艶やな腰ほどの青いストレートロングヘアを揺らす美貌が、清純そうで物静かな印象を与える。例えるなら可憐ながらも儚げな日陰の花だろうか。ややタレ目の青い瞳は気弱そうな色を湛えており、常に怯えている雰囲気が色濃い。
「ハイ……アンヌ、ベティ……話があるっていうから来たけど……何なの？」
「ハイ☆　クレア」
「ハァ～イ♪　クレア」
アンヌとベティが応えると、可憐な少女は薄い微笑みを浮かべた。
「三人が来たら話すわ。ごめん、何か用事でもあった？」
「用事はないけど……三人って、また何かの集まりなの？」
「アンヌ、今日はダメだからね！」
ベティは再び頬を膨らませて睨んだ。アンヌが苦笑する中、頭上から男の声が届く。
「大方、夏休みの計画でも思いついたんじゃないのか？」
階段を下りて来たのは一組の男女だ。呆れたような笑みを浮かべる甘いルックスの優男はマイケル。白い半袖シャツに紺のネクタイと、灰色のスラックスに身を包んでいる。
隣のダニエルは彼の恋人だ。紫のセミロングウェーブヘアと涼しげな凛とした眼差しが大人っぽいクールビューティーで、端正な美貌は色白で気品さえも感じさせる。アンヌ達と同じ制服に身を包んでいるにも拘らず、肉感的なボディーラインは同学年とは思えない艶かしさだ。

「夏休み……？　急なスケジュールは困るわ」
四人の少女達は、学園のイベントで知り合ったことを切っ掛けに友情を深めている。
ボーイッシュなアンヌ、キュートなベティ、ナイーブなクレア、セクシーなダニエル。
クラスや性格も違う彼女達だが、不思議と気が合ったらしい。
「アンヌ、今度は何を計画したのかしら？」
ダニエルは腰に手を当てながら、赤毛の少女を見下ろした。アンヌは子猫のような眼差しで廊下を見渡し、困惑の色を浮かべる。
「うーん、あと一人ね……おっそいなぁ。クレア、トニーと一緒じゃなかったの？」
「うん……学校では、あまり話さないから……」
「え～っ！　だってクレア、トニーと付き合ってるよね？」
大袈裟にベティが驚いてみせた。同じ学園で一緒にいないことが信じられないようだ。青い長髪の少女がモジモジと言いよどむ中、陽気な男の声が廊下に響き渡る。
「遅れてごめん！　やあ、クレア」
走って来るのはトニーだ。緑色の短髪と愛嬌を醸し出す貧相な風貌が、どことなく頼りない。クレアは控えめに微笑み、ボーイフレンドに「ハイ……トニー」と応えた。
アンヌは壁から背中を離すと腰に手を当て、友人を見渡しながら意気揚々と唇を開く。
「集まったわね♪　あんた達を呼んだのはマイケルの推察通りよ。ちょっとベティ、カレシのフリッツにも関係あるんだから、ちゃんと聞いてなさいよ？」
「えっ？　フリッツにも関係あるって……どういうこと？」
「もったいぶらないで早く言いなさいよ。私だって暇じゃないのよ？」
予想外の言葉に素っ頓狂な声をあげるベティ。ダニエルは艶かしい膨らみを描く胸元で細腕を組み、艶っぽい溜息混じりに用件を促した。
「ねぇ、夏休みに皆でキャンプに行かない？」
「「「「キャンプ⁉」」」」
思った通りの反応にアンヌはニヤリと微笑んだ。
「場所はブレアタウンの北にある森の湖畔、エメラルド・レイクよ♪　コテージは貸切で周りに民家一つないんだって。湖も鮮緑色に輝いてスゴく綺麗で大自然の中！　なかなか開放的でしょ？」
調べ上げた情報を得意げに話したアンヌだが、真っ先に美貌を曇らせたのはクレアだ。胸元でキュっと拳を固め、不安げに唇を開く。
「……森の湖畔って、何だか恐いわ。近くに誰も住んでいないんでしょ？」
「大丈夫だよクレア、僕が一緒なんだからさ」
ここぞとばかりに寄り添うトニー。クレアは極度の恐がりなのだ。しかし、彼女の困惑が滲む微笑みから、不安は拭いきれていないと窺える。
アンヌは二人に構わず、最も親しいポニーテールの少女に子猫のような眼差しを流す。
「ベティは行くでしょ？　フリッツも誘ってさ」

「うん、フリッツが行くならいいけどぉ。ほんとアンヌの提案は急なんだから～」
何か予定を組んでいたのか、承諾するもののベティは溜息と共に愚痴を零した。五人中三人がＯＫとなれば、視線はダニエルとマイケルに注がれる。
「キャンプねぇ……シャワーは完備されているのかしら？」
ダニエルは胸を抱くように対の手を肘に当て、空いた手でウェーブヘアを指に絡めながら訝しげな色を浮かべた。真っ先に浴室を確認するところは綺麗好きなのだろう。
「勿論バスルームは完備されてるわよ♪」
ズィと親指を立てた腕を伸ばし、ウインクと共に無邪気に微笑むアンヌ。
「そう……だったら、私は行ってもいいわよ……？」
チラリとダニエルの眼差しがマイケルに流された。一斉に彼へ視線が集う。
「キャンプったって、何するんだよ。わざわざ山まで行って夏休みを無駄にするのか？」
ダニエルは予想通りの言葉に溜息を漏らした。マイケルはインドア派で、とくに遠出を好まない性格だ。しかし、ここで諦めるアンヌではない。
「夏休みだから出来るんでしょ？　なぁに？　ステディーが行くのにカレシは行かないつもり？　だったら、他の男子を誘っちゃおーかなー♪　ダニエル捕られちゃうわよ？」
「ちょっと、私はモノじゃないのよ？　そんな軽い女じゃ……！」
慌てて割って入るダニエルだが、煮え切らない青年に冷たい一瞥を流した。ここまで言われて直ぐに反論しないのは、やはり身体目的で付き合っていたのかと疑念が過ぎる。最近は殆どデートに誘われず、たまに彼の部屋に呼ばれては肌を交える関係だ。
「……わかったよ、行くって！　ちょっと予定が入ってたから……悪かったよ……」
彼女の美貌に華やかな花が咲いたのは言うまでもない。
「これでＯＫね♪　車はエリックが出すから安心して☆　日取りなんだけど……」
こうして夏休みのエメラルド・レイクへのキャンプスケジュールは進められた……。

◆第一章　エメラルド・レイク

目的地までの一本道を一台のイエローバンが軽快なＢＧＭを撒き散らしてゆく。所々に錆や痛みが窺えるが、アンヌが皆でドライブ出来るようにとせがんでエリックに買わせた車だ。エアコンもない中古だが、大学生の彼にとって大きな買い物だったに違いない。

エメラルド・レイクまでの道はコンクリートで舗装されているものの、木々の生い茂る狭い道路は車が一台通るのがやっとだ。幸い対向車が来る様子もなく、前を走る車両もいなければ後続車も見当たらない。

アンヌは右の窓から肘を覗かせ、ぼんやりと退屈そうな瞳で茜色に染まる太陽を眺めていた。青のタンクトップから愛らしいヘソを覗かせており、蒼いデニムのミニスカートに膝丈の紫スパッツ姿がスポーティーで彼女らしい。

同じような風景に飽きたのか、赤毛の少女は子猫のような眼差しを細め、運転席の青年に唇を尖らせた。

「ちょっとお、まだ着かないの～。日が暮れちゃうわよー？」

エリックは青いシャツの胸元に風を送りながら、困惑の色を浮かべた。単調な道のりはアクセルを踏みっ放しで、紺のズボンに包まれた足が疲弊に戦慄く。ハンドルを握ってから長時間が経過しているだけに、少しは労ってほしいと瞳が訴える。

「仕方ないだろ。初めて通る道だし、エメラルド・レイクが遠いのは知ってただろ？　なあフリッツ、この先で良いんだよな？」

エリックは肩越しに振り向き、後部シートのカレッジメイトに再確認を促した。赤シャツに水色の半袖ジャンパーを羽織る青年は、紺のズボンに包んだ足を組むと、茶のウェーブヘアを掻きながら丸いサングラスの精悍な風貌を地図に向ける。

「ああ、そうだな……ここを通って来たから……だな……」

「うん、大丈夫だよ。もうすぐみたい」

彼の右隣から覗き込むのは、黄色と赤に彩られたＴシャツ姿のベティだ。白のホットパンツから曝け出されたプニッとした脚線美が健康的な色香を漂わす。

アンヌはポニーテールの少女を労い、サングラスの男に悪戯っぽく微笑んだ。

「ありがと☆　ベティ。頼りになるカノジョで良かったわね、フリッツ？」

からかわれてバツが悪そうに髪を掻くフリッツ。対照的にベティは彼の横顔を見つめながらニッコリと微笑んだ。

因みに二人がステディーな関係になったのは、彼女が去年のハロウィンパーティーでフリッツに一目惚れしたのが切っ掛けらしい。常に丸いサングラスで瞳を覆う危険な香りを漂わす青年だけに、アンヌとエリックを始めとする面々はベティの趣味を疑ったものだ。

「アンヌ、キャンプ場に到着したら何をする予定なんだい？」

後部シートからトニーが訊ねた。アンヌは窓に預けた肘に頬を当てたまま、気だるそうに答える。

「そーねぇ、本当は森を冒険したり湖を見たかったけど、コテージに着いたら暗くなる前にバーベキューの準備は進めたいわねー」
「だってさ、クレア」
白いTシャツに茶の半袖ジャンパーを纏う青年は、ジーンズの腰を捻りながら後部シートのガールフレンドに視線を投げた。
「……うん、わかったわ」
トニーの瞳に映るのは、赤いキャミソールに半袖の白いシャツを羽織ったクレアだ。青いショートパンツから晒されるしなやかな脚線美に、つい視線を運んでしまう。慌てて眼差しを逸らすと、憂いに美貌を彩るダニエルが映った。
薄紫のブラウスに赤いミニスカートの少女は、紫の髪を指に絡めながら魂が抜け落ちたような表情を浮かべている。茜色の陽光に照らされる姿が哀愁を漂わせて艶かしい。
「私、コテージに着いたらシャワー浴びたいわ……」
「そ、そうよねっ。どんなバスルームなんだろうね……っ」
困惑の色でクレアは、哀愁の美女に微笑んだ。
乗車している人数は七名。約束していたマイケルはいない。待ち合わせ場所から自宅に電話を掛けると、急な用事で行けなくなったらしい。約束を破られたダニエルの気持ちを察したクレアは、共に最後部シートで話し相手を努めていた。本来ならベティとフリッツ、トニーとクレアがシートに収まり、最後部はマイケルとダニエルが座る席順だ。
少し前までトランプで盛り上がっていたが、長時間のドライブで疲弊の色が濃い。気分転換に皆で歌を唄ったりしたものの、喉の疲れと共に掻き消えた。カセットテープも何回同じ曲を繰り返したか分からない。
重い空気が包む中、エリックの声が車内に響く。
「お、プレートがあるぞ！　漸く到着だな」
フロントガラスに映る太い樹木に、矢印を模る木製の板が釘で打ち込まれている。暫く進むとアンヌが前を指差し、笑顔を弾けさせた。
「やっと着くのね～。あっ、見えて来たわよ♪」
森の奥に広大な湖畔を背景とした古風な木造の建物が覗く。大地は瑞々しい緑に覆われており、見渡す限りの大自然だ。爽やかな景色と裏腹に、茜色の夕日がクリスタル・レイクを紅く染め上げ、異様な静寂が不気味さすら感じさせる。辺りに民家もなければ、人の気配すら皆無だった。
ゆっくりと車を空き地に止めると、それぞれのドアが開き、アンヌ達が降りて来る。
「やっと着いたのね～♪　コテージも思ったより大きいじゃない☆」
両腕を、うーん、と伸ばし、赤毛の少女は爽快げに細身を反らした。青いタンクトップの胸元に、小粒な双峰が浮かぶ。
「なんにも無いな。漕ぎボート位はあるのか？」
「ちょっと寒いねー。山の空気ってものかなぁ？」

「コテージに入れば問題ないって。ベティ、行こうぜ」
「……トニー……本当にここに泊まるの？　あたし……なんだか恐いなぁ」
「だ、大丈夫だよ。キャンプ場なんてこんなもんだよ」
「滅多に貸切のキャンプ場なんて聞かないけどね」
　ビクンと震えるクレアを余所に、ダニエルは歩み出した。別に彼女を恐がらせるつもりではなく、率直な感想を述べたに過ぎない。この頃のキャンプ場はテントやキャンピングカーが集う場所であり、誰もが共有できる領域だ。一軒だけとはいえ、貸切のコテージが用意されていることは珍しい。
「ちょ～っと待っててね☆」
　コテージの玄関に辿り着くと、アンヌはドアを前に佇み、手を上に伸ばしながら背伸びした。ゴソゴソとドアの上を弄り、何かを探しているように窺える。仲間達が見守る中、ボーイッシュな美貌に笑みが浮かぶ。
「あったわ！　情報通りね♪」
　振り返って見せたのは、幾つかの鍵が束ねられたリングだ。ニッコリと微笑む彼女と対照的に、ベティが呆れた色を浮かべる。
「えぇっ⁉　そんなん有りなのぉ。無用心にも程があるじゃない」
「こんなんじゃ、コテージの中も期待できないわね」
　落胆の色を滲ませ、ダニエルが腕を組んだ。鍵がドアの上に隠してあるということは、万が一に誰かが許可なく入っても問題ないと感じさせる。
「まあまあ、安かったんだから贅沢は言わないの。開けるわよ？　あれ？　おかしいな、これかな？　んー、じゃこれ？　違う？　あっ……ＯＫよん♪」
　何度か開錠を試みた後、肩越しに苦笑するアンヌ。男達は搭載した荷物を外に運び出しながら、安堵の溜息を吐いた。
「準備が無駄にならなくて良かったよ」
「まあ、開かないなら窓ガラスを割って入るのもアリだろうぜ」
「一応、簡易テントは持って来ましたけどね」
「男性陣はバーベキューの用意よろしくねー！　あたし達は中に入ってるからー！」
　肉体労働を青年達に任せることを告げ、少女達はコテージのドアに消えた。反論や不満を漏らさない状況から察するに、毎度のことなのだろう。
「しかし、ダニエルはどんなつもりで来たんだ？　人数が合わないよな」
「ドタキャン男に愛想が尽きて、俺達にヤラれるのを期待してるんだぜ？」
「やめて下さいよ。そんな根拠のない話……」
　エリックとフリッツが不敵な笑みを浮かべる中、トニーが注意を促した。幾らなんでも飛躍すぎており、アンヌとベティが一緒だというのに彼等の言動が信じられない。
「けどよトニー、おまえだって夜になればクレアと愉しむんだろ？」
「えっ？　わかりませんよっ。彼女はそんなつもりじゃないかもしれないし……」

青年と呼ぶには純情そうな若者は、頬を淡く染めて視線を逸らした。クレアとは肉体関係を果たしているが、彼女から求められたことがなく、それ以来の態度もぎこちない。
「トニー、少なくとも俺達はそのつもりだ。アンヌだってそうだし、ベティもな。クレアだって期待してるんじゃないのか？」
「そうだぜ。折角なんだから違うシチュエーションで愉しめよ。おまえとマイケルの分も用意して来たんだぜ？」
「こ、これは……!?」
フリッツの広げたリュックの中を窺い、トニーは驚愕に動揺の声をあげた……。

「へぇー、結構きれいじゃない？」
一方のアンヌ達は、コテージ内をチェックしながら散策を試みようとしていた。一夜を予定しているとはいえ、老朽化が進んで過ごすのが辛くては話にならない。
玄関のドアを抜けると、二階へ続く階段がある。ベティはタタタっと駆け出した。
「あたし、二階を見て来るねー」
「わかったわ。クレア、ダニエル、あたし達は一階を見ましょう」
すぐ左側に見えたのは大きなリビングだ。長い緑色のソファーがテーブルを挟んで設置してあり、窓が二つ確認できる。テレビは予想通り配備されていない。クレアは調度品に指を滑らせた後、持参した亀のヌイグルミをソファーに置いた。
「意外と埃っぽくないね。まるで週に何度か掃除されてるみたい……」
「お金を取ってるんだから掃除くらいはしてるんじゃない？　隣はダイニングとキッチンね、小さいけど冷蔵庫があるわ。食器は持参で正解ね……あら？　床に扉がある……物置かしら？」
アンヌが眼下に捉えたのは、木製の床に施された小さな扉だ。鍵穴を確認するとポケットから鍵束を取り出し、腰を下ろす。
「これも違う……あぁんッ、なんで合わない鍵がこんなに付いてるのよっ」
「アンヌー、二階は寝室兼個室みたい。二つずつ左右に並んでて奥に一部屋あったよー」
階下へ顔を覗かせ報告するベティ。全部で五部屋あるらしい。彼女の声に気を取り直すと、アンヌは床下に興味が失せたのか立ち上がる。
「そう、わかったわー！　ベティ達の部屋を決めていいわよー。あれ？　そういえばダニエルはどこに行ったのかしら？　ダニエルーっ？」
「なに？　私に用でもあるの？」
ダイニングに姿を見せた少女は、ポカンとした表情でアンヌへ訊ねた。
「用ってほどじゃないけど……どこに行ってたのよ？　心配するじゃない」
「バスルームを見ておこうと思ったのよ。私、シャワー浴びて来るわ」
「ちょっと待ってよ。そろそろ夕食の用意も出来そうだし……そうだ、ベティが二階にいるから部屋を決めちゃいなさいよ。早い者順よ☆」
ウインクを投げて微笑んで見せたが、ダニエルの表情は曇ったままだ。

「そうね……皆の隣でなければ構わないわ。壁が薄かったら堪らないもの」
紫の髪を指に絡めながら薄く微笑み返すものの、空気が重い。当然、ベティの報告通りなら、それぞれのカップルで三部屋は埋まるだろう。若い男女が部屋を共にすれば肌を重ねるのは必然。流石にダニエルを交える訳にもいかなければ、彼女とて望んでいない。
『おーい！　バーベキューの用意が出来たよー！　外においでよー！』
窓からトニーの呼び声が届いた。顔を覗かせると、青年達が手を振っている。アンヌは彼等に手を振り応えると、ダニエルに視線を投げて微笑んだ。
「シャワーは夕食の後でもいいでしょ？　煙や料理の匂いもついちゃうんだし」
「……そうね、私も夕食に有り付けなくちゃ飢え死にしちゃうわ」
アンヌとダニエルはリビングのクレアを呼ぶと、二階のベティに声を掛けてコテージを離れた。クレアが「戸締りしなくていいの？」なんて訊ねたが、このキャンプ場にいるのは仲間内のみ。何かの拍子に鍵を失くしても一大事であり、空けたままでも危険はない。

夕焼けは間も無くして星空へと移り変わり、バーベキューパーティーは月明かりと焚き火の中で繰り広げられた。持参したバーベキューセットで肉や野菜を焼き、クーラーボックスのビールを飲みながら談笑に華を咲かせる。その時だ――――。
「皆に聞いて欲しいことがあるの……」
アンヌは子猫のような眼差しを研ぎ澄まし、重々しく唇を開いた。何事かと仲間達が彼女に視線を注ぐ中、ピンっと人差し指を突き出しながら、神妙な面持ちで紡ぐ。
「このキャンプ場はね……恐ろしい事件があった所なの……」
「えっ!?」
突然聞かされていない話に、クレアがビクッと肩を跳ね上げた。アンヌは続ける。
「それ以来、閉鎖されていたんだけど……キャンプ場のオーナーが謎の死を遂げて……。持ち主のいないキャンプ場に誰もが自由に入り込んでいるけれど、その事件を知るものは少ないわ……」
「ちょっと待ってよ。だって……アンヌ、安く借りたって言ったじゃない……」
今度はダニエルが口を挟んだ。彼女の表情も神妙な色を浮かべており、指摘とたとえるよりは、アンヌの行動に確認を求める響きにも聞こえる。
「それはベティが指摘した通りよ。幾らなんでもドアの上に鍵を隠しておくなんて無用心じゃない？　このキャンプ場はもう営業されていないのよ」
「そっ……」
「アンヌ……話を続けてくれ」
ダニエルが抗議しようとした刹那、エリックが先を促した。赤毛の少女は神妙な表情を崩さずにコクリと頷く。
「たしか、三年くらい前だったかしら？　千九百七十八年――夏休みにキャンプへ訪れたアベックが次々に襲われていって、助かったものは一人もいないの。そして、犯人はどこへともな

く去ってゆき、いまだに捕まっていないという話よ。ただ一つわかっているのは……」
アンヌは仲間達を一通り見渡した。一同に冷たい緊張が走る。クレアはいつでも耳を塞げるよう両手を頭の横に掲げており、可憐な美貌は今にも泣きそうだ。
「犯人はホッケーマスクを被っていて……その事件が起こったのは……。そう……確かこんな満月の日だったかしら……」
アンヌが夜空の満月を煽ると、仲間達も一斉に天を見つめる。
暗雲が漂う中で静かに輝く満月は、心なしか異様な彩りを感じさせた――――。

「あ～あ、面白かった！」
バーベキューパーティーを終えてコテージのリビングに戻ると、アンヌは満足げに両腕を広げて微笑んだ。窓際にはファンシーな女の子の人形が飾られており、亀のヌイグルミから察する限りクレアが持参したものだろう。ベティはもう一つの窓に花を飾りながら、未だ顔色の優れない青い長髪の少女に悪戯っぽい視線を流す。
「クレアが一番ビクビクしてたんじゃない？」
「だって～、恐いんだもぉんっ」
クレアは胸元に両手を運び、愛らしく萎縮しながら涙目で素直に答えた。アンヌが腰に左手を当てると、背後の少女に呆れたような視線を流す。
「バカなこと言ってんじゃないわよー。作り話に決まってるでしょ。雰囲気を盛り上げる為のお話よ☆」
「よかった～、本当だったらどうしようかと思っちゃった」
安堵の溜息を漏らすクレア。そんな彼女にベティとアンヌが愉快そうに笑う。
「クレアは恐がりだからね」
「ウソよ、あんなの」
「そりゃそ～でしょ、そんなことならわざわざキャンプになんか来るわけないでしょ」
確かに二人が言うような事件があった場所なら、夏のバカンスに選んだりしない。もしかすると、皆は嘘と承知の上で雰囲気を盛り上げる為に恐そうな表情を浮かべていたという訳か？
クレアは途端に恥ずかしくなり、話題を変えるべく辺りを見渡す。
「……ダニエルはどこにいったの？」
リビングに居るのは三人。青年達は男同士で飲むということで未だ外にいるが、彼女は自分達と一緒にコテージへ戻った筈だ。
「シャワー浴びに行くって言ってたわよ」
ベティの答えに納得する。そういえば、戻る時にも早くシャワーを浴びたいと呟いていた。改めて思えば、自分も未だ汗を洗い流していない。一人で率先してバスルームに入ったダニエルに感心すら抱いてしまう。
「あ……あたしもシャワー行きたいな」
期待の眼差しを二人の少女に流しながら、クレアはポツリと呟いた。嘘の作り話とはいえ、

単独行動はやはり恐い。
「今のうちに行ってきなよ」
「ダニエルと変な関係にならないようにね」
「……そ、そんなのなるわけないでしょっ」
アンヌの素っ気ない言葉と、ベティの意味深で厭らしそうな笑みに、思わず頬を染めながら声を荒げてしまう。アブノーマルな光景だが、美人でスタイルも良いダニエルとなら間違いがあっても許せてしまう気がしたからだ。
「今のうちに行ってくれれば？」
声のトーンに怪しい響きを湛え、アンヌが不敵な笑みを向けた。
「そうそう、一人でシャワーなんか浴びてると襲われちゃうわよ♪」
「や～ん、そういうこと言うのやめてよー」
ピンクに彩られた背徳的な妄想がホッケーマスクの大男に変容する。忘れようとしていたことをベティに思い起こされ、クレアは瞳を潤ませた。ポニーテールの少女とて、悪気がある訳ではない。ただ、あまりにも少女が恐がる為、ついからかってしまうのだ。

――ダニエルはバスタオル一枚を肢体に包んだ姿で、バスルームに足を運んでいた。
アンヌの話による持ち主のいないキャンプ場のコテージにしては床の埃も少なく、長い廊下を渡ってゆくのも不気味に感じない。木製の壁に嵌め込まれた擦りガラスのドアを開けると、タイル張りの床と木造のバスルームが映った。水と湯の出る二つのノブとシャワーが設置してある。灯りは薄暗いが仕方ない。
「……まあまあね。壊れていたり穴も開いてないし、やっぱりアンヌのジョークか……」
安堵の笑みを零すと、肢体を包むバスタオルをドア脇の壁に掛け、一糸纏わぬ肌理細やかな美肌を曝け出す。白い裸体は程良く筋肉が付いた中肉中背で、括れた腰のラインから優麗な曲線を描くヒップラインは白桃のように瑞々しく、しなやかな脚線美も艶かしい。
クルリと優雅に踵を返すに合わせ、八十七センチの豊満な乳房が“ゆさっ”と横に揺れ、均整の取れた瑞々しい膨らみが美しさを更に彩る。下腹部の起伏を飾る紫の茂みも手入れが行き届いており、とても綺麗で艶めかしい。
少女は一日の汗を洗い流すべく、シャワーに向かい合うとノブを捻る。キュッと乾いた軋みを反響させた次の瞬間、熱い雫の雨がダニエルの頭上から洗礼を降り注いだ。心地良い水滴の音色が奏でられる中、バスルームに湯気が発ち込め、雫を滴らせる艶かしい肢体をゆっくりと覆い隠してゆく。柔肌を弾くシャワーの恩恵を浴びる美貌が仄かに紅潮し、心地良さそうな吐息を漏らす。
「ふぅ……気持ちいい……一日の疲れが洗われる感じだわ☆」
少女は暫し雫の洗礼に身を委ね、至福のひとときに時を刻んだ――――。

――ゆっくりと視界を揺らしながらコテージ内を何者かが徘徊してゆく。

木造の廊下は少し前にダニエルが歩いた道だ。鈍い足取りと荒い息遣いの中、耳に心地良さそうなシャワーの音色が届く。薄っすらと擦りガラス越しにたおやかな肢体が映る。シルエットの胸部は魅惑的な膨らみを描いており、シャワーノズルを持ち上げて湯を浴びている様子が窺えた。視界を左右に振ると周囲は壁に覆われており、部屋の類は見当たらない。水滴の弾ける音ゆえか、浴室の人影も警戒していないようだ。

バスルームが歩調に合わせて距離を詰める。ドアノブに手を運ぶと躊躇なく開け放った。

視界に映るダニエルを包む湯気がドアから一気に吸い出される。少女は一瞬なにが起きたのか分からない呆気にとられた表情を浮かべたが、瞬時に戦慄の色を弾けさせると、振り向きざまにシャワーノズルを薙ぎ放つ。

「きゃああぁぁぁッ‼」

異物の軽い衝撃を覚えるものの、気にすることなくダニエルへ肉迫する。少女は魅惑的な裸体を隠すのも忘れ、慄く眼差しを向けながら立ち尽くしていた。しっとりと濡れた美貌と火照った白い柔肌。水滴を滴らせるたおやかな肢体はセクシーグラビアから抜け出したように扇情的だ。

「……ひんっ」

漸くダニエルは切迫した表情で向かって左側へ弾けるように転じたが、獲物は射程距離内。彼女の口を左手で塞ぎながら壁に叩きつけ、女体の逃亡を容易く阻止する。

「う……っ！　んんッ！」

端正な美貌は戦慄に彩られ、瞳は今にも涙を流しそうに潤んでいた。塞いだ口から恐怖に慄く震えが伝わって来る。視線を下ろせば、膝がガクガクと震えていた。再び視線を上げてプルプルと戦慄く白い乳房を捉えると、右手を下から伸ばして艶かしい膨らみを撫であげる。“たぷんっ”と揺れる果肉は瑞々しい重さと張りの伴う弾力を感じさせ、指先に快感を与えた。堪らず掌に包み込んで揉みしだく。指を押し返す柔肌の感触が心地良い。

「ふぅ……んっ……ッ」

やんわりと揉み解すに連れ、指で擦られる淡いピンクの乳首がシコリ、厭らしく勃起する。コリコリとした蕾の抵抗感が指に愉悦を覚えさせ、執拗に刺激するから堪らない。

「んんっ……ふぁ……ん……っ‼」

そのまま愛撫を続けながら美貌を捉えると、瞳はしっとりと潤み、頬が紅潮していた。感じていることを見透かされ、少女は羞恥に彩られた眼差しを逸らす。

「んッ！　んん～ッ！」

乳房から手を放して下腹部へ触れた刹那、ダニエルは瞳を見開き、涙の雫を舞い散らしながら切迫したかの如く足掻き出した。震える手が更なる行為を阻む。だが、所詮は儚い抵抗だ。構わず指を伸ばすと水滴に濡れた茂みを滑りながら陰部へ触れる。ぷっくりと起伏を描く楕円の秘唇を撫で回し、恥裂に沿って指を這わすと少女の肢体はビクンと弾けた。女体の反応を愉しみながら、愛撫を頂に集中させて充血した淫核を転がす。

「ふっ……んんッ……ん……っ」

腰を振り乱してダニエルは恥部を弄ぶ手から逃れようとする。だが、如何に抵抗のダンスを刻んでも、執拗な手の蠢きは払い退けない。抵抗を嘲るように秘唇を抉じ開け、太い中指をムニュっと恥裂に分け入れた。探り当てた膣孔に指を呑み込ませると、秘肉の粘膜が戦慄きながら絡みつく。

「ふぅ……んッ！」

未だ十分に潤っておらず、熱い膣は苦痛を訴えているように感じられた。だが、ここで幕を引くつもりはない。少女の状態に構わず、指のピストンを淫猥に繰り出す。

「んぐッ！　ふぅッ！　んッ！」

律動の衝撃か豪腕の為せる技か、少女の下腹部が弾み、足元が爪先立ちと化す。乳房が上下に舞い揺れるさまは、さながら男根に突き上げられているようだ。

「ふぅぅんッ！　ふっ……んんッ……っ！」

唇を塞がれて籠ったダニエルの喘ぎが漏れる中、新たな音色がセッションを刻み出す。指の抽挿を繰り返す度にクチュクチュと淫猥な旋律が奏でられ、床を打ち鳴らす雫の音が乾いたリズムを刻んだ。ぴったりと閉じていた両の太腿は次第に開き、苛烈な責めに屈服の蜜が伝う。心で嫌がっても身体は素直に性感を受け入れてしまうことに、少女は羞恥を感じているようだ。淫臭が漂うに連れ、瞳を固く閉じるさまが愛らしい。

「ふっ……んっ……くふん……っ……ふあぁっ……はぁ……はぁ……んっ！」

口を開放するとダニエルは切ない吐息を弾ませた。指を恥部から引き抜いた刹那、少女の戦慄く膝が疲弊の中で崩れそうになる。だが、狩人は獲物を解放しなかった。

「きゃぁっ！」

彼女の右肩と左腰を掴み、いとも容易く豪腕で裸体を振り回す。ダニエルは背中を向けながら壁に左手をつき、尻を突き出す姿勢に転じた。右肩を押さえつけている為、逃げられない。

「いや……もう……やめて……っ」

白い肩越しに向ける美貌が弱々しく哀願した。濡れる紫の瞳が恐怖と裏腹に期待の色を感じさせるのは、気のせいだろうか？

「……!!」

妖艶な女体を前に熱く滾った男根を引き出すと、少女の瞳は大きく見開かれた。

小刻みに震える陰部を指で押し開き、膣孔に亀頭をあてがった刹那、一気に肉棒を叩き込んだ。肉ヒダの波を掻き分けるに連れ、官能の電流が迸る。充分に解れていない粘膜は若干キツいものの、絡みつく秘肉がペニスを刺激して堪らない。

「いッ……いたっ……」

ダニエルは衝撃に見舞われ、涙の雫を散らせながら苦悶の色を滲ませた。抵抗する処女膜を感じることなく愉悦の肉壁に埋没を果たしたのだから、バージンではないだろう。

「あっ……やッ……やめっ……はぁッ……いや……っ」

悲痛な哀願に構わず遠慮なくストロークを刻み込むと、少女の肢体は苛烈な責めに突き揺らされ、熱い吐息を弾ませた。小刻みに震える細腕で壁を支えるさまが意地らしい。嫌がるもの

の膣肉は歓喜の熱い蜜を亀頭に浴びせ、粘膜が肉棒を絞り上げる。柔肉の蠕動が男根を淫らに扱き、官能の愉悦に叩き込んだ。

「あんっ……❤　あんっ……❤　あうっ……だ……だれかぁ……」

リビングやダイニングから遠く離れたバスルームの声は、誰にも届かない――――。

体験版は以上となります。
お読み頂き、有り難うございました。
短いですが、楽しんで頂けましたら幸いです。
ところで登場人物の紹介画像的なものって必要でしょうか（笑）？

続きもお読み頂けましたらとても嬉しく思います☆